

まわった。午後は、まず日光国立公園管理事務所に向かった。ここでは、国立公園の制度、日光国立公園内での問題などについてうかがった。前日の国立公園内の土地を開発、利用する立場の方々からのお話とこの日の国立公園内の自然を保護していく立場の方のお話の両方をうかがって、考えさせられることが多かった。このヒアリングの後は再び自由観察があったので、東照宮などを拝観したりした。最後に、日光市役所で日光の歴史、観光、工業などについてお話をしていただいた。日光は観光都市ということが出来るが、観光による市の収入はあまりなく、かえって駐車場の整備などを行わなければならないために観光での収支は厳しいということだった。また清滝にある古河の工場では、安くて豊富な電力を使って足尾でいったん製錬された銅をさらに製錬しており、日光市には一時工場関係者が多かったが古河電工が千葉・福井に工場を新設したために工場関係者が流出して人口減少が続いているという。人口減少に対して過疎対策委員会を設けたりしているそうだが、なかなか事態は改善されないということだ。このヒアリングの後、日光市役所前で解散と

なり、帰途についた。

足尾・日光は東京から近く、特に日光は以前に旅行をしたことのある人も多くて身近な場所であると思ったが、改めて見直してみると知らないことばかりであることに気がついた。また、2つの地域を訪れたことにより、1ヶ所だけでは学べなかった点についても、比較することによって学ぶことができた。

宿舎では、各自朝早く起きて近くの竜頭ノ滝を見に行ったり、中禅寺湖畔まで散歩にいったりして、自らその場所に親しみを持つ努力をすることができたようだ。(ただお団子が目当てだっただけでも言われているが。)しかし、いろいろな場所で多くの方から説明をしていただいたのに、皆ノートをとるだけで質問をするといった積極的な面がなく、事前の勉強不足が悔やまれたという反省すべき点もある。だが、今回の巡検では班ごとに分かれて行った調査など初めて行ったこともあり、フィールドワークの重要性について改めて認識できたことは、大きな収穫だったと思う。

(9月4～6日 井内教官指導)

西伊豆巡検

佐藤 朗子

10月7日、8日の2日間に渡って、式先生の御指導による西伊豆巡検が行われた。

7日の午前10時20分に三島駅に集合。遅刻の者もなく、マイクロバスで最初の目的地である、柿田川水源地へ向かった。ここから川が始まっていると言われてもピンとこなかったが、川底の砂が湧き出る水で動いているのを見て、水源地であることを実感した。

狩野川放水路、葦山方面の反射が、江川邸を見学して、国道136号線を南下していった。136号線でも宇久須へ出られるのだが、いい道を通るだけでは巡検らしくないということで、湯ヶ島、持越を通る、狭くて曲がりくねった道を行った。持越鉱業所では、金・銀の精製過程を説明していただいたが、かなり専門的で頭を悩まされた。その後、

仁科峠で賀茂村の役場の方と合流し、カーネーションのビニールハウス栽培地へ向かった。途中で1度バスを降りたが、風が大変強く、寒かった。バスから見る笹が、曲がっていたのも納得できた。

黄金崎研修センターに着いてから、賀茂村の概況を説明していただいた。バスから降り、今日の前日が終わったということで一気に疲れが出てしまい、説明を伺っている時に活気がなかった。

賀茂村では、村の95%を占める山林・原野の利用法について、牧草地にしたり、桜の名所にして新しい観光地にすることを計画している。その他に「ふるさとの森づくり」が行われた。これは、都会の人に森のオーナーになってもらい、賀茂村の特別村民として迎えるものだ。また、賀茂村は

東海沖地震の時、7mの津波に襲われるとされており、海岸に堤防を築き始めた。しかし、堤防によって海が見えなくなる、景観が損なわれるという観光業者の苦情や、費用が大変かかることから、作業は、はかどっていないようだ。

この日の賀茂村版の新聞で、私たちの巡検のことが、なんとトップニュースだった。

2日目は黄金崎から安良里港へ向かった。安良里港には冷凍庫などの設備がないため、水揚げは沼津などにするようだ。船の乗組員は現在減少しており、高齢化がすすんでいる。私たちが安良里港に着いた時に丁度、広洋丸の進水式が行われていた。船は、港から少し出て戻ってくるのだが、その時に紅白のおもちを岸へ投げることになっている。人が続々と集まってきて、おもちが投げられるのを待ち受けていた。私たちもビニール袋を渡されて、地元の方と一緒に必死になって拾った。

安良里で、私は初めてなまこ壁というのを見た。独特の雰囲気をもったものだった。色は白と黒で、白の部分が盛り上がっている。規則正しい模様が、かえって不気味に感じられた。ここで賀茂村の方と別れ、松崎町へ向かった。

松崎町も賀茂村と同様に、観光業に力を入れているようだ。説明を伺っている時に、松崎町の観光業は軌道にのったという自信のようなものが感じられた。役場で、今日巡る予定の場所を含めて

説明していただいた後、実際に現地へ出発した。この時も、役場の方が同行して下さった。役場付近には、なまこ壁の家や、なまこ壁の欄干などがあり、なまこ壁にも慣れた。

桜葉漬工場では、高さ190cmほどの樽が並んでいて、圧倒された。この樽の中で桜の葉を1ヶ月位塩漬けにしておき、機械で1時間ほど圧力をかけて製品になるようだ。この桜の葉は和菓子に使われる。ここで使う桜の葉は、近くに山桜の畑をつくり、そこから回収しているということだ。

和洋折衷の建築である岩科学校を見てから（ここでもなまこ壁を見た。）岩地のマーガレット栽培地、雲見の民宿「高見屋」と巡った。雲見では、現在は後継者の心配がないが、三代目が継ぐかどうかには不安が残るようだ。

この後、景色を楽しみながら、波勝崎（野生の猿がいた）奥石廊、そして解散場所の下田へ、午後5時近くに着いた。

今回の巡検では、海岸地形の話や、様々な土地の利用の仕方、地図と現場を照らし合わせるなど、内容が盛りだくさんだった。また、この地方の地名の難しさに驚いた。聞いた地名がなかなか地図で探せなかった。なお、バスに乗っていただけで疲れてしまった自分の体力のなさも実感した。

(10月7日～8日 式教官指導)

三浦半島巡検

大川 聖 美

あいにくの空模様であった。時折降る雨に傘をかざして歩くのは、なんとも煩わしい。しかし自然地理学の巡検では、「雨の城ヶ島」などと洒落込むわけにもいかない。こうして、私達の三浦半島巡検は開始された。御指導は浅海先生にいただく。主な観察事項は、単斜構造からなる三浦層群の一部である三崎層と、辺り一帯の海食による地形的特色であった。

まずは、京急三崎口駅からバスで城ヶ島に向かう。降車後、バス停付近で三崎層の走向及び傾斜

を測定。みんなクリノメーターを思うように操れないでいる。当て方すらおぼつかない。頭でわかっているつもりでも、実際使ってみると意外にも自分の知識の甘さに気付く。実施体験は重要である。昼食後は、島の南部の入江へ。そこには事前学習のスライドで自分が最も興味を持っていた、ケスタ状の海食面が広がっていた。三崎層は、ゲンブ岩（黒色）とアンザン岩（灰白色）の互層になっている。それは傾斜が60度ほどあるので、軟質のアンザン岩は波に削られ、硬いゲンブ岩が